The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	DIAMOND SHAKE
Author(s)	小鶴, 紀子
Citation	デザイン理論. 2025, 85, p. 102-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100295
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

DIAMOND SHAKE

小鶴　紀子（作家名：小鶴乃哩子）　脚本家・映画監督

作品概要

1980 年代，日本のロックシーンのみならず，世界にもその名を轟かせた伝説のバンド RED WARRIORS には，2 人の才能あふれるミュージシャンがいた。ダイアモンド☆ユカイと木暮 “Shake” 武彦である。40 年以上もの間，苦楽を共にした 2 人が，新バンド「Diamond Shake」を結成した。ロックンロールに情熱と人生を捧げた男たちの歴史と，60 代を迎えた現在，なお前を向く彼らの生きざまを描くドキュメンタリー映画の制作を依頼された。

筆者が構成・監督，さらにエグゼクティブ・プロデューサーとして制作を指揮した。撮影は，セカンドアルバムの発売とともに始まった今年の全国ツアーを追いかけてのライブ映像を軸に，2 人へのインタビューやファンへのインタビュー，さらに過去の映像と写真を織り交ぜながら，筆者自身が撮影した映像も交えて構成した。これまでプロの世界では，主に脚本家として活動してきた筆者にとって，劇場用長編映画のデビュー作である。大学院時代に制作した短編映画については，これまでこの意匠学会で計 4 回パネル発表し勉強させていただいた。みなさまに，この作品をご報告できることを光栄に思う。

映画祭への出品と公開予定

本年 9 月 5 日～10 日に開催される「第 20 回チェチョン国際音楽映画祭」の正式出品作品として，ワールドプレミア上映が決定した。今回のパネル発表では，チェチョンに出品するバージョンに沿って解説する。なお，本作品はチェチョンを皮切りに，来年春以降いくつかの国際映画祭への出品の後，劇場公開を予定している。

本作品で試みた映像表現手法

アーティストのドキュメンタリー映画を手がけるのは初めてであるが，これまで大学院時代に追求してきた表現手法をここでも活用できると考えた。

① 映画に「物語」を導入

単にアーティストのライブやインタビューを構成するだけでは，よくある音楽映像になってしまう。まずは楽曲の世界観を鮮明に伝える「物語」と，実際のライブ映像を重ね合わせる全体構成を構想した。彼らにはグループ名を冠したオリジナル曲「Diamond Shake」がある。その独特でミステリアス，かつダークでありながら軽妙なサウンドをモチーフにし，俳優を配したイメージ映像により物語を構築した。物語では，アーティストの少年時代を彷彿とさせる少年 2 人が，怪しげな夜会に迷い込み，その音楽に魅了されていく。その音楽を奏でているのが，未来の自分たち＝Diamond Shake である。

② 映画に「多層時間モデル」を導入

大学院における研究では，多層に重なり合う「時間性」が，物語の効果を高めることを論じてきた。具体的には，①で示した虚構（俳優が演じる少年たちの物語）と，現実（アーティストによる実際のライブ映像）とを，過去・現在・未来を行き来する多層な時間軸の構成により織り交ぜる映像とすることを意図した。さらには，アーティストの

過去と現在とをインタビューによる「語り」で表現し，さらに多層的な時間表現とすることで，ドキュメンタリー映像の新しい表現を試みた。

③　アートとしての映画とデザインとの関係

劇場用映画には，アートとしての映像表現が求められる。つまり幅広い視聴者に理解される必要があるテレビのドキュメンタリー番組とは，一線を画した表現が求められると考えた。そこで，テロップやナレーションといった説明的な表現をできるだけ省くことに挑戦し，映像でどこまで語れるかを目指した。前回の意匠学会大会で発表した無声映画「泡沫少女」（脚本と監督補を担当）において，言語を使わない表現を試行錯誤した経験を生かしつつ，「物語」や「時間性」を扱う手法に，デザイン的な発想を持ち込んだ。

意匠学会での過去の作品発表と本作品との関係

これまで意匠学会で作品発表を計4回行ってきた。「地域資源」と「物語」の関係，時間意識の多層性をモデル化した概念「多層時間モデル」に着目し，研究成果を短編映画として制作し発表してきた。

以下にそれぞれの概要を示す。

①　シネマコンサート～こひ～

（意匠学会第61回大会 パネル発表 2019）

福井県の地域資源を活かす映像作品の第一弾として，脚本・監督を務めた習作。県内で撮影した短編映画を上映するスクリーンの前で，地元のアーティストが効果音やBGMを生演奏するシネマコンサートという形式を実験的に試みた。映像としては，地域資源としての福井県の景観を，スタイリッシュに撮影することを目指した。

［2018.10.6 福井県民ホールにて上演］

②　短編映画「Missing」

（意匠学会 第63回大会 パネル発表 2021）

福井の景観資源を活かす表現手法として，風景に登場人物の心情を重ねる「物語」を導入することを試みた。また，「時間性」を意識し，主人公の失われていく若さという「時間」や作品の「上映時間」，また演じる俳優たちの肉体の「時間」などの時間性を重ね合わせ，地域資源を魅力的に表現する一つの手がかりを得た。

③　短編映画「out of the blue」

（意匠学会 第64回大会 パネル発表 2022）

福井市広報課の依頼を受けて制作したインナーブランディングのための映像作品。ここでは，「Missing」で得た表現手法に，どこにでもありそうな日常の風景に登場人物の心象風景を重ねる（＝特別な風景に見える）ことを試みた。撮影当時はコロナパンデミックが始まり，街の景色や生活様式も変化した時期にあたる。物語では，コロナをイメージさせる流行病の蔓延で，当たり前の日常が奪われる高校生を主人公に，その刹那的な時間と地方都市における街中の風景の魅力とを重ね合わせて描いた。

④　饒舌な静寂～短編映画「泡沫少女」～

（意匠学会 第65回大会 パネル発表 2023）

西端実歩監督の依頼により，無声映画の脚本を担当した。ここでは，通常の映画づくりとは逆の工程を辿り，監督の頭の中のイメージを共有することからはじめ，そのイメージに物語を導入することで世界観を構築し，台詞のない物語へと昇華させた。

⑤　Diamond Shake

（意匠学会 第66回大会 パネル発表 2024）

これまで一作ごとに獲得した表現手法が，今回の作品にすべて生かされたように思う。ドキュメンタリーであっても，「物語」がある方が強い印象を与えることができると考えた。さらに効果的に心を揺さぶるために「多層時間モデル」が活用した。今後も，研究と制作の往復により，オリジナリティのある映像表現を目指したい。

参考文献

小鶴紀子，地域資源の映像化における「物語」と「時間性」の表現手法に関する研究，福井工業大学博士論文，2024